

「天命に安んじて人事を尽くす」—清沢満之の求道における根本課題としての自己と他者— (後半部分)

加来雄之先生 (大谷大学)

難度会臘扇忌法要 2016/06/03

後半部分

それでは、もう少しお話を続けさせて頂きたいと思います。

今、資料の3ページのところをお話しているわけですが、先程も言いましたように、資料には難しい言葉が羅列してありますので、それを読んでいくというよりも、私が清沢先生から学んだことを申し上げていくときの「背景」と言うんでしょうかね、そこにこういう言葉があつて清沢先生の歩みを私はこういうふうを受け止めさせていただいた、ということ述べるために資料を配っております。

III 番目の【「天命」と「人事」】というところに入って行きたいと思います*¹。この部分につきましては、この本の方にも書かせていただいておりますので、繰り返しになるかもしれませんが、私自身が「天命に安んじて人事を尽くす」という清沢先生の言葉を受け止めるときの大きな歩みをお示しするということになると思いますので、〔このテーマについて今から〕お話しします。まず、もともと私たちがよく知っている言葉というのは、これは中国の宋の時代の儒学者であつた「胡演」という人の言葉です。それは①番に書いてますように、「人事を尽くして天命に聴(まか)す」、「聴く」とかいて「まかす」と読むんですけども、こういう言葉として私たちはよく知ってますよね。一生懸命自分ができることをやれば、あとはもうそれが成功するかしないか、それは私たちの力の及ぶところではない。それはもう天におまかせするのだ。こういう言葉として私たちがよく知っているのですね。聞いたことがある言葉だと思います。「人事を尽くして天命に安んず」という言葉もその派生語として私たちは聞き及んでいると思いますが、清沢先生がこの言葉の順序を入れ替えた。「天命に安んず」ということを先に置いて、そして「人事を尽くす」ということを後に置かれた。これがいったいどういう意味があつたのかということですね。それについては、③をまず見てもらいますと、こう書いてあります。

彼の人事を尽くして天命に安んずるの事に過ぎずと雖とも我は寧ろ之を天命に安んじて人事

*¹ レジュメ, p. 3, III 【「天命」と「人事」】.

を尽くすと云はまく欲す^{*2}。

訳してみますと、あの「人事を尽くして天命に安んずる」という有名なことばに過ぎないのだけれども、私はむしろその言葉を「天命に安んじて人事を尽くす」と言いたいと思います、とこういうような意味ですね。どうして、清沢先生は言い換えるということが必要であったのか。④番にはその言い換えねばならない清沢先生のお気持ちがもう少しよく表れていると思います。その文章は、「祈祷は迷信の特徴なり」という論文ですね。祈祷するというのは迷信というものの持っている非常に特徴的なことである、と。祈りですね。「こうなりたい」とか「こうありたい」というね、そういう「祈り」というのは迷信の特徴なんだ、というような... 先ほどね、どれだけ「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と言っても、「南無阿弥陀仏」をしながら「病気を治してください」とか「不安を取ってください」といことは、「南無阿弥陀仏」という言葉が表している意味とは違うことを求めていますよね。こういうのは「迷信」と言われるものですよね。本当に私たちが出遇わねばならないものに出遇わない。そこに何かこう自分の思いの延長にあるような救いというものを求めていく。これが迷信の特徴です。それが多くの場合「祈祷」という形を取るわけですね。その中で清沢先生は、結局、私たちの人生の態度として大事なことは「人事を尽くして天命に安んずる」と言ってもいいのだけれども、しかしながら、やはりできるならば、「余は天命に安んじて人事を尽くす云ふの可なるを思ふ」... その方が適当であると思う、とこういうふうな言い方をしておられます。

このように清沢先生自身にとっても「人事を尽くして天命に安んず」という言葉を決して捨てられたわけではありません。若いときから、この晩年の〔明治〕33年のですね、論文にも見えるように、その言葉はその言葉として非常に大事にしてこられた。しかしながら、他力の教えというものを通すならば、私たちは「天命に安んじて人事を尽くす」と言わなければならないのだ、とこういう表現ですね。少し考えてみますと、「人事を尽くして天命にまかす」と言う場合には、その「人事」というものの内容が何であるかということは何も問われていませんね。例えば、お金儲けのために一生懸命努力する。そして、そのお金儲けができるかできないかということは何が私ができることではない、と。運命におまかせするのだ、と。こういうふうな言い方もできますし、「戦争に勝つために」と言っても良いですし、色々なことで「人事を尽くす」、人間として自分のできることを一生懸命やる、あとはもう人間を超えた力にまかせるしかないんだ、と。自分で決めるわけにはいかない、と。私はできることを一生懸命やるんだ、とこういう形ですよ。

しかし、清沢先生が入れ替えたことによってこの言葉の持つ意味はまったく変わってくるわけですね。つまり、「天命に安んずる」ということは、まず天の命令ですね、「天というものが私に求めているものにしっかりと立とう」ということです。「安んずる」ということはですね。そして、その中において自分のできることをしていこう。ですから、「人事」というものは、どこまでも「天命に安んずる」という内容になりますよね。如来という呼び声というものに出遇って、その如来の呼び声に立って私はこの人生においてなすべきことを一生懸命なしていこう、これが「天命に安んじて人事を尽くす」ということの意味になりますね。私たちが人生を生きていくときに、何が一番大

*2 レジュメ, p. 3 III-(1)-③.

きな問題かと言うと、「本当に為すべきことがはっきりしない」ということですね。さっき言ったように、様々な思いや価値観や先入観などに振り回されながら、私たちは人生というものを右往左往するわけですね。そこにおいて、「今ここにこうしてある事実立ちなさい」と。「そこに立って本当に為すべきことをなしていきなさい」。例えば、病気であるならば、病気であるという事実立って、そこに治療を受けるか受けないか、それはどっちかわかりませんね。それはどっちかわからないけれども、しかし、そのことを自分の「思い」というものを超えて選び取って行きなさい。特に「如来の智慧」というものに照らされながら選び取って行きなさい、とこういうことになりま

すね。
その具体的な方法については、清沢先生は、後に申し上げますけれども、人事を尽くす方法、そこにですね、「道德」という問題を見ておられますね。「人事を尽くせ」と言われてもね、どう尽くして良いかわかならない。そのときにお釈迦様の様々な善悪の教えというものを見出しておられますね。だから、善悪の教えをして救われるわけじゃないんです。救いというものがあって、はじめて私たちはその如来の言う善悪というものに自分の歩みというものをまかしていくことができる、こうおっしゃっているわけです。

このように、清沢先生の「天命に安んじて人事を尽くす」ということを、私たちの出遇っている仏教というもの、浄土真宗の教えというものに照らして受け止めてみたいと思うのですが、その前にですね、少し『臘扇記』という書物についてもお話をしてみたいと思います。4 ページですね、またあとで3 ページに帰っていきますが...ここに【IV 『臘扇記』問題】という難しい言い方で言葉をあげております*3。清沢先生の書かれた日記の中で、非常に有名な日記として『臘扇記』という日記があります。「臘扇」というのは「12月の扇」という意味で、12月には扇風機がいりませんから、「要らないもの」ということの意味を押さえています。ちょうど作っていただいたこの本の裏側にその『臘扇記』の表紙がついていますね。真ん中に書いてあるのが、この『臘扇記』ですね。明治31年8月15日から書き始められたので「起」と書いてあって、「黙忍堂」—黙って忍ぶ、耐え忍ぶ—という語を付けて、そして『臘扇記』—役に立たないもの—の... まあ日記と言ってもそこには日々の出来事と同時に、求道の歩み、信念を確立するための歩みが記されているわけですが、今から紹介する『臘扇記』というものは、清沢先生のご一生においても、求道においても、大きな転機というものを与える、〔転機〕が記されている書物だと思います。これも西方寺様の方から「影印本」と言ってね、写真で撮ったものがね、先生が書かれたままに文字が印刷されて出版されています。

私はそれを見てはじめて『臘扇記』という書物の持っている意味がわかったんです。その感動がここに書いてあるんですけども、一番有名な「自己とは何ぞや」というあの言葉というものが、清沢先生にとってどのような感覚で書かれたのか。僕のイメージでは「自己とは何ぞや！これ人世の根本的問題なり！」と力強い文字で大きく書かれていると思い込んでいたんですね。ところがそうじゃなかったんですよ。非常に端正な筆致で書かれている。だから、そこだけ見ていると、それだけ「ぼん」と浮かび上がってくる言葉じゃないんですね。そのことが大きな問題となったのが、

*3 レジュメ, p. 4 IV 【『臘扇記』問題】.

ここにも書いてますように、「絶対他力の大道」という、これも非常に感動的な文章です。清沢先生の文章として私たちがよく知っているものなんですけれども、実はこの「絶対他力の大道」という文章は、清沢先生の『臘扇記』から多田鼎先生が文章を引き抜いて作ったものなんです。だから、言葉そのものは、清沢先生の言葉なんですけれども、編集は多田先生なんです。そのことによって、非常に感銘深い文章になっているんですね。ただ問題は、多田先生が編集された「絶対他力の大道」は、それはそれとして感銘深いし意味も深いと思うんですが、清沢先生が『臘扇記』で著作された内容とは少し変わってしまっているんです。

そのことを示すためにこの〔レジュメ 4 ページの〕【(2)『臘扇記』の根本問題】ですね。『臘扇記』の一段の文章をあげてあります。「絶対他力の大道」に引かれている部分を四角で囲んであります。

自己ト八他ナシ 絶対無限ノ妙用ニ乗託シテ任運ニ法爾ニ此境遇ニ落在セルモノ即チ是ナリ
 只夫レ絶対無限ニ乗託ス 故ニ死生ノ事亦憂フルニ足ラス 死生尚且ツ憂フルニ足ラス
 如何ニ況ンヤ此ヨリ而下ナル事件ニ於テオヤ 追放可ナリ 獄牢甘ンズベシ 誹謗擯斥許多
 ノ俊辱豈ニ意ニ介スベキモノアランヤ 否之ヲ憂フルト雖トモ之ヲ意ニ介スト雖トモ吾人ハ
 之ヲ如何トモスル能ハサルナリ 我人ハ寧口只管絶対無限ノ吾人ニ賦与セルモノヲ楽マンカ
 ナ*4

とこういう文章ですね。少し文書は変えられているのですが、そのことはまた後で申し上げますね。つまりここにはですね、「絶対無限に立つしか救いはないのだ」ということを非常に高らかに述べられています。特に一番最後の文章に注目して欲しいんですが、〔レジュメ〕5 ページですね... 追放であったり、牢獄に閉じ込められたり、非難されたり、恥をかかされるとかね、そういうことがあっても私たちはどうすることもできないのだから、私たちはむしろ絶対無限が私たちに与えたものを楽しもうではないか。こう読んでしまう... ここで切ってしまうと、実は楽しむべき内容は何かと言うと、死生のことであったり、追放のことであったり、獄牢のことになるんです。つまり、私に与えられる様々な苦しみ、苦難ですね、苦難というものを楽しもうではないか、と聞こえるんですね。でも、次続けて読むとこうです。ここは引かれていないですが、

絶対吾人ニ賦与スルニ善悪ノ観念ヲ以テシ避悪就善ノ意思ヲ以テス*5

こう読むと、絶対無限が私たちに与えてくれて、私たちが楽しもうと言っているものは、それは「苦難」ではなくして、「避悪就善」、「悪を避けて善に就こうとする意思」なんです。つまり、「善悪というものにしっかり立っていこう」という意思、これを私たちは与えられている、これを楽しもうではないか、と言っているわけですね。つまり、私たちにとって都合の悪い境遇が与えられる。病気であってもそうですし、生きていれば色々な境遇が与えられる。その「境遇」を楽しもうというのではなくして、その境遇を引き受けてそこで「人事を尽くしていくということ」を楽しもうと

*4 レジュメ, pp. 4-5, (2)-①【『臘扇記』と「絶対他力」】

*5 同上.

言っているわけです。その問題を本当に引き受けていくことができる、そういう自分に与えられている意思を楽しもう、とこういうふう読み解けられますね。ですから、次に線を引いているところを見ていただきますと、

何モノカ善ナルヤ 何モノカ悪ナルヤ 他ナシ 吾人ヲシテ絶対ヲ忘レサラシムルモノ是レ善ナリ 吾人ヲシテ絶対ニ背カシムルモノ是レ悪ナリ^{*6}

こう言いますね。だから、「自己とは何ぞや。他なし」という言葉と同時に、「何ものか善なるや、何ものか悪なるや」という問もあるわけです。つまり、いったい私たちが生きていく上において、必ず人間関係を生きるということは「善悪」ということが問題となってくる。でも、「いったい善とは何だろうか」「悪とは何だろうか」、こう問うて「絶対に背かしむるもの」、つまり、「如来に背くもの」、「今ここにこうしてあるという事実立たせないもの」、「そういう思いに立つて生きること」、これが「悪」なんだ、と。「今ここにこうしてあることにしっかり立たしめるもの」、そういうはたらき、そういう方向を「善」と言うんだ、と。こういうふうにおっしゃっているんですね。そして、そのことによって...一つ一つの言葉を確かめていくと非常に良いのですが...一番最後にはそういうものの展開というものが「絶対は私たちに満足を与える」。念仏するところに私たちは本当の満足に出遇える。「今ここにこうしている」という事実立つ。「思い」を超えて立つことによって、それこそ本当の私の満足なんですね。他に何も求める必要はない。今ここに与えられるこの事実こそ、私たちが帰って、立ち上がる場所である。これが「満足」ですね。そして、反対は、つまり「思い」に立てば必ず私たちは「不満」になるのだ、と。こういう形によって、その展開として「慈悲」とか、「大悲」とか、そして「仏道」とか、こういう問題が押さえられていきます。

このようにして、清沢先生にとっては、「自己とは何ぞや」ということは、決して自分の内面を見つめて、「本当の自分とは何であろうか」というような問題ではないのですね。そうではなくて、むしろ、「自己とは何ぞや。これ人世の根本的問題なり」と言って「自己とは他なし」と、「何ものか善なるや。何ものか悪なるや。他なし」とこう言っているように、「他なし」と言われている内容は2つあるんです。「自己とは他なし」ということ、そして、「何ものか善なるや。何ものか悪なるや。他なし」と、こう言われている2つの内容が『臘扇記』の流れなんですね。私は前半を「天命に安んずる」という言葉で、「自己とは何ぞや」、これを「絶対無限の妙用に乗託して任運に法爾にこの境遇に落在せるもの」。「絶対無限のはたらき」、つまり、「今ここにこうしてあるという真理そのものから立ち上がってくるはたらき」、それに身を任せることによって、私たちは今ここにこうしてあることにきちっと立つことができる、そこに「落在する」、落ちる。思いに舞い上がっているのではない、そこに「すどん」と落ちることができる。これが「天命に安んずる」です。そして、「何ものか善なるや。何ものか悪なるや」、この「避悪就善の意思を以てす」と言われていますし、あとの方には「避悪就善の天意を感ず」と書いてある。つまり、「悪を避け善を為せ」という天の意思を感じる、それを生きよう、というですね、それが後半の「何ものか善なるや。何ものか悪なるや。他なし」という問ですよね。これが「人事を尽くす」ということの内容です。

^{*6} 同上。

ですから、『臘扇記』のこの内容もやはり、「天命に安んじて人事を尽くす」ということに尽きているのだ、とこう言ってもいいと思います。ですから、それを今度は、ちょっと余分になりますが、この「如来」の方を見てもみますと... だから、清沢先生にとって、「如来」というものはいったいどこにあるのか。それは、私の内なる心のなかにある何ものかではありませんし、私のどこか外にある実体的な他者でもありません。そうではなくて、今私がここにこうしてあるという、あるがままの事実から立ち上がって私たちをその事実に戻そうとする「はたらき」を如来というのです。だから、それは外にも内にもないんです。私たちが念仏をするところにその意思を感じず。「ただ念仏」という行だけがあらゆる価値を超えた私に戻す行である。だから、どんな自力の行であっても、修行であっても、念仏を離れたら仏法の行にならないんですよ。だから、法然上人は「あらゆる行というのは、回向を必要とする」と言ったのですね。お念仏だけは回向を必要としない。あらゆる行は、それが仏道の行であるためには、「回向」、振り向ける必要がある。私は何のためにこの本を読んでいるのか。この本を読むのは、単位を取るためである、とかね。この本から良い内容を取って、お話に使おうと思っているのか。この本を読んで人生にとって本当になくはならないものは何か求めようと思っているのか。つまり、この本を読むことの方向性を決めるのが「回向」です。だから、本を読むという行為そのものは仏道でもなんでもありません。仏典を読んでもね。その仏典を読んでこの本を読むことによって、人生においてなくてはならないことを探してみよう、こう思っているのは普通の〔自利の?〕行でしょう。そのことを通して、その学びを通して得たことを人々に伝えていこう。こう思えば利他の行ですよ。つまり、その行為というものの意味を決定するのが「回向」です。その「回向」というものを「自分の」思いですること、これを「自力の回向」と言います。「他力の回向」、つまり、「如来の回向」というものを表すのが、法然上人は「ただ念仏」だ、とおっしゃったんです。念仏だけは回向が必要ない。念仏だけは私たちが自分の思いを超えて、今ここにこうしてあるという事実に戻らせる行だからです。

そうすると、この【(3)如来と自己】^{*7}というね、清沢先生が言う「如来」、それは、一応「私が信ずる対象」というような表現を取っておられますね。

私の信念とは、申す迄もなく、私が如来を信ずる心の有様を申すのであるが、其に就て、信ずると云ふことと、如来と云ふことと、二つの事柄があります^{*8}。

つまり、普通は僕達は「如来を信ずる」と言うわけですね。「私が如来を信ずる」。「私があなたを信ずる」。「私が麻原彰晃師を信ずる」。全部信ずるのは「私」です。同じように「如来も信ずる」。しかしながら、「如来を信ずる」ということは、一つ非常に特徴的なことがあって、そこに清沢先生は、

此の二つの事柄は丸で別々のことの様にもありますが、私にありては、そうではなくして、二つの事柄が全く一つのこととあります^{*9}。

^{*7} レジュメ, p. 5, (3) 【如来と自己】

^{*8} レジュメ, p. 5, (3)-(ア)

^{*9} 同上.

とこうありますね。つまり「如来を信ずる」と言うときには、それは「私」という主体がいて、「如来」という客体を対象的に信ずることとは違うんです。私は清沢先生の「我が信念」だけではそこははっきり受け止めることができなかつたんですが、私がそのことを一番教えてもらったのは曾我量深先生の「如来我となる」という言葉でした。もちろん親鸞聖人の「如来より賜りたる信心」。如来が私にはたらいているという目覚め、これが信心なんだ。如来を信ずるんじゃない。如来が私にはたらいているという事実こそ信心なんだ。だから、念仏というのは、私たちが仏様を対象として念ずることじゃないんですね。私は如来のはたらきの中にあるという「表現」が念仏なんです。その念仏が、易行であることにおいてあらゆる価値を超えるわけです。その念仏の言葉が「南無阿弥陀仏」という阿弥陀仏の、「あらゆる」宗教心の根源というものを指す言葉であることによって、私たちはもっとも深い人間の意味に出会うわけです。だから、「ただ念仏」のところに、私たちは仏道というものを歩む主体を獲得する。それが、「如来を信ずる」ということの実事なのです。だから、念仏を離れて如来を信ずることはない。でも如来を信じたなら何が起こるか。如来を信じたなら、私たちはこの自分に与えられている、いわゆる「宿業」と言われているような、今ここにこうしている、他の誰とも違う、誰とも代わることのできない、この生命をどう生きるかという問題が答えられてくる。

そうでなければ、僕は仏教なんて意味がないと思うんですね。これもよく学生に言うんですね。浄土真宗を学んで救われると思っっているようだけれども、君が浄土真宗を勉強してお浄土に生まれた、と。君の好きなね、本当にきれいなね、君の好きな奥様がキリスト教だったらその奥様はどこに生まれてくるんや、と。君は浄土真宗を学んで念仏して阿弥陀様の浄土へ行ったら、奥さんはキリスト教の世界に行くんか、と。そしたらもう会えないよ、と。僕たち、そんな宗教を求めているわけではありませんよね。それは清沢先生に帰ればものすごくはっきりするわけです。私たちは浄土真宗の教えを通して、今ここにこうしてあるという事実に立ち返って、思いを超えて本当に自分の生命、そして自分の愛する人と共に生きていくということを成し遂げようとしている。うちの妻がキリスト教という教えを通してその同じことを実現しようとしている。そのときにはじめてどんな宗教であっても、実現しようとしていることは、たった一度の繰り返すことのない人生、そして、誰とも代わることのない唯一の生命というものを、大きな大きな過去から、過去も現在も未来も、すべての人がそのことを担って生きてきた、そういう生命を私も生きるのだ、ということでしょう？だから、清沢先生が言うような「無限と有限」と言うと、なんか哲学っぽい話で、「かたいなあ」という思いをするかもしれませんが、実はそういうふうにはじめて浄土真宗というものを、親鸞聖人が言われた浄土真宗というものは、決して「教義」じゃないんですね。本当の拠り所、「真宗」、これを

〔板書〕完全なる立脚地

と読めば良いわけですね。つまり、親鸞聖人は「真宗」を求めた方なんです。それは清沢先生の言葉で言えば、「処世の完全なる立脚地」*10を求めたわけです。そのために宗教があるんですね。

*10 「吾人の世に在るや、必ず一つの完全なる立脚地なかるべからず。若し之なくして、世に処し、事を為さむとするは、

では、少しお話を戻します。〔レジュメ〕3ページの下の方ですね。【III (2) 他力門仏教における「天命」と「人事」】というところを見ていただきたいのですが... 今のように押さえてくると「天命に安んじて人事を尽くす」ということを私たちがどのように受け止めることができるのか。つまり、「自己とは何ぞや」という問は、「天命に安んじて」という形ではじめて明らかになるのだ、と言えるんですね。私たちの「思い」というものをどれほど積み重ねても、どれだけ素晴らしい思想というものを学んでも、「本当の自己」というものは見つからない。「本当の自己」というものは「天命に安んずる」ということ、それは、この『臘扇記』の言葉で言えば「絶対無限の妙用に乗託し」というところですね。「如来のはたらきに身を任せる」、ここにはじめて自己というものが成り立つ。そして、「善とは何ぞや。悪とは何ぞや」、これが「人事を尽くす」。まあこの「善とは何ぞや」という言葉はないんですけども、しかしまあ私が作った言葉ですが、それは「避悪就善の天意を感じず」ですね。つまり、この人間関係を本当に如来の意図に沿って生きていって欲しいというんですね、そういうものとして受け止めることができる。

さらにそれを私たちがもう少し親鸞聖人の言葉というものに返すとですね、『教行信証』の一番最初の冒頭の句... 私は『教行信証』をずっと読んできましたけれども、この句の意味がわかったときに初めて、『教行信証』が自分のことになったと言うんですかね。『教行信証』という親鸞聖人のお仕事が、自分の問題として受け止めるようになりましたね。それは何か。

竊に以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船^{*11}

という言葉ですね。つまり、「難思の弘誓」ですね、「思いを超えた」でしょう、「難思」〔というのは〕？ 私たちは「思い」の中で迷ってますからね。「思いを超えた」、「弘誓」ですね、「どこまでも弘がる誓い」ですね。私たちをその如来のはたらきに返さずにはおかない、という誓い、ですね。そういうものが「難度海を度する」、この会の名前が「難度会」ですけども、親鸞聖人の「なんどかい」は「難度」の「海」ですね、「渡り難い海」、「渡り難い人生の海」ですね。色々な想定外のことが起こってくるこの渡り難い、思いもしないこと、決してこのようなことは自分には起こらないだろうと思ったことが起こってくるような、そういう「渡り難い人生の海」というものを渡っていく「大きな船」であった。『教行信証』は大きな書物ですけども、結局「全部」そのことが書いてあるんです。『教行信証』に書いてある「念仏」も「信心」も「大涅槃」も「お浄土」も、「全部」それは「難度海を度す」、この「渡り難い人生を渡っていく」、清沢先生の言葉で言えば、「処世の完全なる立脚地」としての「大船」、大きな船を得るためなんです。死んでからお浄土行くためではないんです。そういうことを親鸞聖人ははっきり書いているでしょう？

そして、そのことを通すと、「天命に安んじて」ということを受けているのがですね、「難思の弘誓は」です。そして、「人事を尽くす」と書いているのが、「難度海を度す」です。つまり、「難思の弘誓」という「誓い」、その「誓い」というものに本当に、きちんとそれを受け止めてそれに立つ。これが天命に安んず、でしょう？そして、この「難度海を度す」、この渡り難い人生を渡って

怡も浮雲の上に立ちて技芸を演ぜんとするものの如く、其の転覆を免るる事態あたはざることを待たざるなり、然らば吾人は如何にして **処世の完全なる立脚地** を獲得すべきや (清沢満之「精神主義」); cf. レジュメ, p. 3, II-(2)-②.

*11 真宗聖典, p.149 (教行信証・総序).

行こう、これが「人事を尽くす」、という言葉で答えられているんだ。こういうふうにも受け止めることができる。さらには、「安んじて」というとなんだろうか、というそれは、私のはたらきというものをしっかりと「信ずる」、「受け止める」ということですね。さっき言ったようにこれは、対象的にということではありませんね。その「はたらきを受けている」というのが「信」です。はたらきを受けてから、「ああ、このはたらきか」と思えば、もう「思い」です。「はたらきを受けている」という事実だけが「信」ですね。これは「如来より賜りたる信心」と言いますよね。

お母さんの愛情を受けている子供のことを考えると、お母さんの愛情をかけられていることを考えるときに、子供が「ああ、これがお母さんの愛情か」と思ったら、それはもう「思い」です。子供が思った内容でしかありませんね。「お母さんに呼びかけられているんだ」というその目覚めだけが、その事実だけが「信」でしょうか？本当の。それを私が受け止めたならそれはもう私の内容です。そういうことを「如来より賜りたる信心」と言っている。「安んじて」はそういう意味です。だから、「安んじて」というのは、そこにしっかりと立つということです。対象ではない。そのはたらきの中に自分の身を置くということ、これが「安んずる」です。「安心」の「安」はそうですね。「安心」の「安」は、「安らかになる」という意味ではない。「しっかりとそこに立つ」という意味です。だから、「天命に安んじて」は、「天命に安らかな気持ちになる」という意味ではない。天命というものにしっかりと立つ。そのはたらきの中にある。こういう認識の方法です。対象的認識ではない。対象的認識はどうしても自分の思いが破れない。私たちはそのはたらきの中にあるという方法においてのみ、それを破ることができる。その方法は「念仏」なんですね。

それと同時に、「人事を尽くす」というのは一体どういうことかと言うと、それは「教人信」ですね。「人を教えて信ぜしむ」ということ。この「人を教えて」ということがどうして「人事」になるか、ということは、これは清沢先生の『臘扇記』を読んでいくとわかるんですが、自分が信じてそして人に教えていくということは、これは「人と関わっていく」ということですね。私たちの生命というものは、2つの関わりを持っている。1つは「無限」との関わり。私たちは「無限」の中にある。これがまあ「自信」の問題ですね。しかしながら同時に私たちは「有限」なものとして様々な「有限」なものに関わりながらある。その「有限」なものに関わりながらあるという生命を尽くしていかなければならない。もっと言えば、その生命を尽くすために「無限」なるものに触れなければならない。「無限」なものに触れるのが人生の無限ではないんですよ。そこで終わったら、それは神祕主義になります。感動で終わってしまいます。太陽の光というものが、何のためにあるのか。ありがたいでしょう、太陽の光ね、ありがたい。でも、太陽の光を見るためにあるのではない。太陽の光を見たら目が潰れる。太陽の光というものは、今ここにあることをはつきりと見せるためにあるんですよね。私たちがこの世を生きていくために太陽の光があるのであって、この世を忘れるために太陽の光があるのではない。太陽の光を見てしまえば、私たちは目がくらんでしまう。だから、人事を尽くすということを忘れたら、私たちは一つの「宗教的神祕主義」になってしまいますね。まあ、それも一つの救いなんですけれどもね。でもしかし、その救いというものは、人生の本当の意味というものを開いてこないと思いますね。

ですから、清沢先生は「天命」というものを「如来の勅命」、「呼び声」として受け止めて、そして如来のはたらきというものの中に生きるということをして「人事を尽くす」という形で受け止められ

た。それを『臘扇記』の中では、「就善」という言葉ですね。「善をおさめる」ということ言葉で表しています。そしてそれを一番最後に書いていますように、清沢先生にとっては、「天命に安んじ人事を尽くす」ということは、「連続的循環行事」*12、つまり永遠に回っていくことです。螺旋状に進んでいくことですね。ぐるぐる回りではない。「循環」ですからね、「連続」するんですから、どんどんとですね、本当のあり方に向かって歩いていく。まあ、これを「往生」と言うと僕は思いますが、「往生」と言うのは、「無限なる世界と有限なる世界というものが関係を持つあり方」ですよ。無限の世界に行ってしまったら、「往生」の意味ないですよ。有限の世界にいただけでも、「往生」の意味ないですよ。有限なる世界と無限なる世界、穢土と浄土というものの「関係」を「往生」と呼ぶのです。私たちがしっかりと、この人生というものを浄土に向かって一步一步あゆんで行く。なぜ歩めるか。それは、浄土のはたらきの中に私たちが生きるからでしょう？これを清沢先生は最初に言った「根本的撞着」と言うんです。如来の中にありながら私たちは如来を忘れていく。だから、いつも如来に立ち返っていかなければならない。そういう歩みが「往生」です。実体的なものを考えるとね、ここが穢土で向こうが浄土で、いつあっちに行けるんだという話になってしまいますよね。それも一つの方便の教えとしてあります。それはそれで無駄ではない。そういう形で私たちは示されないとわかりませんからね。でもしかしながら、そのことを通して私たちは、本当に如来のはたらきに向かう自己というものは一体どうやって成り立つかということそれは、「如来の呼びかけに答えている自己」においてのみ成り立つ。「思い」には成り立たない。そのことをはっきりと教えてもらうんです。これが「他力門」ということです。目的は「自力門」と同じですけども、その人間の持っている思いの有限性ですね。どれだけ思いを尽くしても、人間の思いなのだ、ということをお願い知らせる、これが「他力門」の教えの特徴なんですね。

そうして考えてみると、〔レジユメ〕4ページの表に書いてますように、実は私たちが「浄土に目覚める」ということの意味が、「天命に安んじて」です。浄土は行く場所ではない。私の曾祖母ちゃんが言ってましたけどね、変わった人でしたけれども、100歳過ぎてからは少し認知症が入ってきて、うちの妹の寝ている部屋に行って押し入れを「ガラガラガラ」と開けて、そして勤行をはじめますね。まあ、お仏壇と間違えていると思うんですけども。でも亡くなるまで『教行信証』をずっと暗記していましたね。すごいお婆ちゃんだと思うんですけども、そのお婆ちゃんが、「雄之。お浄土は行く所ではない。お浄土がこちらへ来るんだ」とこういうふうに言っていました。そのときは高校生でしたからわかりませんでしたけれども、今思えば、「ああ、そうだ」と。お浄土の功德というものが私たちにはたらくから、我々は思いとしてはお浄土に向かって行けるんです。これは方便です。でも真実のあり方は、「如来の浄土の光の中にある」ということです。その目覚めを「真実信心」と言います。このことの区別がはっきりしないと...まあはっきりしなくてもいいんですよ。救われます。救いはあるんです...でも、そのことがはっきりすることによって、親鸞聖人の教えを通してそのことがはっきりすると、私たちが救われているという事実をより深く受け止めることができる。ですから、「人事を尽くす」はこれは「穢土に生きる」ということです。「浄土に目覚めて、穢土を生きる」ということが、これが「天命に安んじて人事を尽くす」という

*12 レジユメ, p. 4, III-(2) 【他力門仏教における「天命」と「人事」】の項の最後の文。

ことだと思えますね。

では、実際にこの「人事を尽くす」とはいったいどういうことなのか、ということがこの〔レジュメの〕6ページの方に書いているんですが*13... もう時間がありませんので、特にこのことはまた清沢先生の文章というものを読んでいただければと思います。特に清沢先生の文章というのは、昔の人の文章ですから声に出すことを前提に書かれているんです。ですから、声に出して読まないで清沢先生の文書というのは響いてこないようになっています。『歎異抄』でもそうなんですけどもね。原則としてカタカナで書かれているものというのは、声に出して読むという、公の場で読むということを前提にしています。私信はひらがなで書くんですね。手紙とかはね。でもそれが声に出して読まれるべきだというのはやっぱりカタカナで書いていますし、清沢先生の時代の文書は声に出して読むということが前提になっています。

そこに、「人事を尽くす」ということを清沢先生がどんな言葉で表しているかということ、例えば「他力の摂取を仰ぎ...」、これは「天命に安んじて」ですね。「人世の正道を踐行せんことを勤むる」と*14。つまり、他力の智慧に照らされて、この世の正しい道を歩んでいこうと勤めること、これが「人事を尽くす」ということだ、と。だから、これは道德をして、良いことをして救われましょう、という話ではないんです、と。私たちは道德をして、お念仏をして良い人間になれば救われると思っている。これはまったく反対なんです、と。そうではなくて、如来に照らされて、はじめて私たちは思いを超えてこの自分に与えられたたった一回の人生というものを歩んでいける、正しく歩んでいけるんです、と言っているんですね。そうするとですね、お釈迦様の様々な教え、例えば、『阿含経』に出ている教え、これを清沢先生は非常に大事にされましたけれども、それは『阿含経』に出てくる教えを、「これを実践して救われるんだ」と思ったらどうもできないですよ。でも、「如来のはたらきの中に安んじて、この呼びかけられていることに従っていこう、できるかできないかはわからない、でも、それに従って行こう」という生き方、こういう生き方が与えられるということですね。できなくとも如来の中にあるという事実は、寸毫も動かない。そういうような確信の中に生きることができると。下の方にも清沢先生の有名な言葉があります。

我等の大迷は如来を知らざるにあり*15。

私たちの大いなる迷いは結局如来ということを知らないことに尽きる。如来のことを知らないから、私たちは思いによって自分の事実を忘れて、舞い上がったり落ち込んだりして生きていく。そうじゃない。如来に出遇えば、私たちは自分の「分限を知る」。「分限を知る」というのは自分のできることだけやるという意味ではないですよ。「本当に今ここにこうしてあるという事実に立ち返る」ということを「分限を知る」と言っているんですね。だから清沢先生はこの一連の文章の中でこうもおっしゃいますね。「修養を積みば分限は広がるのだ」と。如来に従って歩んでいけば、私たちの分限はどこまでも広くなり、深くなっていくんだと、こうおっしゃってますね。だから、私たちは修養に努めるんだと。生命は限りなく深い。生命は限りなく深いけれども、それを受け止め

*13 レジュメ, p. 6, V 【「人事を尽くす」】.

*14 レジュメ, p. 6 V-(1)-①.

*15 レジュメ, p. 6, V-(3).

る私たちの心は有限なんです。生命終わる最後の瞬間まで、私たちの道はどこまでも深まっていく。大きな海に触れたように、どれだけ汲んでも汲んでも汲み尽くせないものに触れた。でもそれは足りないという意味ではない。触れているものは無限なものに触れている。こういう安心感ですね。そういう安心感があって、はじめて私たちはどんなささやかな営みの中にも、無限の意味を見出すことができる。私たちがやっていることはちっちゃいことかもしれません。でもそのちっちゃいことの中に、法藏菩薩の五劫思惟の歩みを仰いでいくことができる。これほどありがたいことはない。その事実を「天命に安んじて人事を尽くす」という言葉で教えられているのではないかなあと思います。

ちょっと大雑把な話になってしまいましたけど、でも私は清沢先生がけっして「自己とは何ぞや」ということを考えるときに、自分の問題だけが大事だと言っているわけではない。本当にこの時代、この社会の中に生きていく自分、そういうものに出遇わなければならないという課題、それが「自己とは何ぞや」という課題であったし、その課題は必ず「善とは何ぞや、悪とは何ぞや」という問題に展開していく。またはそれに照らし返される。そういう自己でなければならない。そして、そういう自己に与えられる私たちの人生の事実を非常にわかりやすく「天命に安んじて人事を尽くす」という言葉で教えてくださった。これは本当にありがたいことではないかなあと思います。

以上で、難度会の臘扇忌法要の法話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。